20周年に当って

20年の思いで

富山市民病院　石田　礼二

富山県農村医学研究会が発足して20年，豊田会長のもとで，その業績はめざましいものがあります。私は発足当時，県医師会の学術担当理事をしていた関係で，理事に名をつらねました。それまでは特に農村医学に興味があったわけでもなく，農夫症のことさえよく知らなかったのが実状です。今この20年を振り返ってみて，いくつかの思い出が浮かびましたので，こゝに書き記してみます。

沢田秀忠先生のこと：先生も研究会発足当時，理事をしておられました。当時先生は富山市厚生部の保健指導室に勤めておられ，住民検診などを担当していました。その頃先生は「ビニールハウス病」に興味をもたれ，私も手伝いに引っ張りだされたのですが，現地調査で初めてビニールハウスに入ってみるなど，身をもって経験したことがなつかしく思い出されます。特に仕事に取りくむ先生の情熱には敬服させられました。その業績は県医報や，農医研誌第２号に収載されています。沢田先生は平成元年７月物故されました。御冥福をお祈りいたします。

農村婦人の貧血調査のこと：会員としてした初めての研究は，理事会の提案で決った農村婦人の貧血の調査でした。予想されてはいましたが，その頻度の高いのには驚きました。私にとって印象深かったのは，調査におとずれた時の農村の方々との交流です。ひざをつき合せて健康診断をしたり，病気の話をしたり，病院の診療とは全く異なる雰囲気でしたが，この経験はその後の診療に役立ったように思われます。又この調査研究に協力された厚生連の職員の方々や，生活改良普及員の方々の熱意は大へんなものでした。その成果は数年後の追跡調査で，貧血の著しい改善という成績になって研究会誌に発表されています。

農業の肝機能に及ぼす影響調査のこと：農村地帯の肝疾患の頻度や，農繁期の肝機能に及ぼす影響などを調査したのですが，昭和56年10月，秋田で行われた第30回日本農村医学会総会のシンポジウムにシンポジストとして出席し，発表したことが貴重な経験として，良い思い出となっております。

この20年，日本の農業の形態は大きく変化しました。しかしそれなりに又新たな健康障害の問題が出現してきます。今後も研究会の役割りは重要な位置を占めるでしょう。今後の発展を祈りつつ，思い出をいくつか記させていただきました。

20周年に当って

農医研の20年に寄せて

高岡市保健センター　熊谷　武夫

富山県農村医学研究会はこのほど創立20年周年を迎えられたと伺いました。

昭和35年に農協高岡病院でインターンをして，当時の院長・豊田文一先生に種々御教示を頂戴し，また入局直後の出張の際にも，白崎幸雄先生の皮泌科で，今の「ミニドック検診」に当たる巡回診療にも参加させて頂いたことのある私にとりましては，これまで直接には研究会にご縁がなかったとはいえ，大変嬉しく思われます。

まして昨年から高岡市保健センターの兼務を命ぜられ，癌検診の現場で厚生連高岡病院の皆様の御仕事を拝見する機会があり，また豊田先生の御推挙で，農医研の理事にさせて戴きました今日では，この20年の会員の皆様の御活躍に心から敬意を表するものであります。

先日は厚生連高岡病院地域医療研修室で開かれました「第7回富山県農村医学研究および健康管理活動発表集会」を拝聴しましたが，豊田先生・越山先生はじめ創立以来の諸先生方がお元気で，壮者をしのがんばかりに討論をなさっておられる御様子に感銘致しました。

厚生連滑川病院の小川先生の「厚生連検診センター，10年間に発見された癌」の討論で，越山先生が農夫症の対策が曾ての農村医学の中心課題であったと話されました。

確かに，これまでは農作業に基づいた健康障害の研究と対策が主題であって，農夫症をはじめ農薬中毒・農業機械による災害の調査・研究が熱心に進められてきました。

しかし老人保健法の施行以後は，地域の保健に係わる諸問題も，本研究会で取り上げられるようになり，今回も高岡市農協・荒木保健婦さんは「太田支所における健康づくり運動」を発表なさいました。これに関連して，太田小学校の水谷先生は「健康カレンダーによる”うんち調べ”」を報告されました。

現在高岡市におきましては保健センターを中心にして，各種の保健事業に取り組んでおります。とりわけ健康教育事業につきましては，地域の婦人会・老人クラブをはじめとして種々な皆様に御協力をお願いしておりますが，なかでも高岡市太田地区におきましては，担当の俵・山崎両係長（保健婦）が，農協太田支所の横越支所長さん・県厚生連の大浦さんなど関係の方々に大変に御協力を戴いております。

農家の多い地区では，地域活動におきましては農協の大きな組織力が大変頼りになります。

「うんち調べ」の御報告は司会の渡辺先生もユニークな発想であると評され，同じ条件で同じクラスに一年後に再調査をしたら良いと助言されました。この結果が食生活改善の成果を判定できる資料になりうれば良いと考えますが，保健活動を評価する調査の方法の一つとしてこの試みは面白いと思いました。

地域保健活動は医師・保健婦などの専門職種はもとより，種々な方々の御協力のもとに行なわれますので，研究成果・活動の発表も特定の職種の集会では，折角の効果も期待薄となりかねません。その点でも，農医研の集会では関係者が一堂に会して，研究の成果を

語り合うといった雰囲気が感じられ，しかも分かり易くお話がなされて大変勉強になると存じます。

市の保健行政を担う者と致しまして，今回の集会に参加させて戴きました感想を述べさせていただきましたが，20周年を機会に富山県農村医学研究会が，ますます御発展なさいますことをお祈り申し上げます。

また癌検診に関しましては，高岡市におきましては，これまでも高岡病院の胃癌検診車に出動をお願いして来ておりますが，平成2年度からは高岡病院にも「検診センター」が併設されると伺っております。

農協組合員の検診が向上しますことは，ひいては高岡市の検診成績が向上するものと期待しております。

これまでも滑川病院の「検診センター」が滑川市の地域検診の受診率の向上に大きく貢献なさっておりますことを聞くにつけましても高岡病院の「検診センター」の御活躍を期待致すものであります。

今後も宜しく御指導・御協力をお願い申し上げます。

20周年に当って

富山県農村医学研究会設立二十年の節目に思ふ

新川病院　越山　健二

富山県農村医学研究会が発足したのは昭和四十四年十月で平成元年で二十年の節目の年を終えた。これより遡(さかのぼ)る事二十年，日本農村医学会が発足したのである。これら学会の設立と組織化に盡力されたのは豊田文一会長であり若月俊一先生である。この兩(リョウ)人が今日尚矍鑠(カイ)としてたくましい情熱をもって農村医療の推進普及，後進の育成につとめておられる事は敬服すると共に，国民医療の充足にとって大きな喜びである。

この時に当り農村医学の経過をふりかへり，今後の展望について私見を述べてみることにする。

農村問題は，いま大きな変革のときを迎えており国政の大きな課題となり国際的な視野で論議が高まっている。こんな時に原点にもどって考えてみる事が大切だと思う。

日本の思想，文化の形成は第一次産業の農業であり，豊かな山紫水明の国で農耕生活を営み独自の国民性が培かわれ，民族発展の基本となったのである。めぐまれた四季を通し大地を生活の糧として生き抜き固有の文化を築き上げてきた歴史がある。近年産業が第二次，第三次産業へと変転する中で農業の果した役割や今後果すべき期待される使命を忘れかけてきたように思う。

時代の変化の中で農業は過酷で重労作業が続き，長い封建時代は貧困と悪疫に悩まされた時代でもあった。医療は一般民衆のものではなく乳幼児の死亡率も高く寿命も短く，今日からみれば，まさに想像以上の健康障害が続いたのである。それは明治以後から昭和初期までも長く続き，健康や疾病に対する不安恐怖は民衆の中に深く浸透していたと思われる。特筆したい事は明治以後の日本の医療は私的な開業医制度によって行われており，公的なものとして富山県内では日本赤十字病院以外には存在しなかった。そんな中で農民が組合病院として公的医療を開始したのである。富山県では昭和十一年十月産業組合高岡病院が設立開業した。その後農民の手によって全国各地に農協病院が開業されていったのである。昭和二十年の敗戦後，アメリカの指示もあり，公的医療の普及から国民健康保険事業が保健施設として全国各地に多くの診療所，病院を開設した。その後自治体がこれ等施設を一部吸収し一応の公的医療の普及をみせたのである。

医療は本来自立，自助の精神が大切でありあらゆる苦難のなかから公的医療を拓(ひら)いていった農民の逞しいエネルギー，先見性を高く評価したい。

今回医療に対する要求は数多く，不安や不満もある。農業は機械化，化学肥料，農薬など省力化がすゝみ片手間農業となり，第二，第三次産業へと兼業化されてきた。農業，農家，農村は激動の最中にあり，思考や行動も高度化され，複雑多様となっており，それが健康に及ぼす影響もめまぐるしいものがある。

戦後間もない頃に発足した農村医学会は，今日からみれば過酷な筋肉労働による慢性疲労をとり上げ，いわゆる農夫病と取り組み，かがまり仕事，冷え，低栄養，不衛生，気嫌ねなど十大症状を指摘し，人間とその背景に

ある農業，農家など生活環境を重視した。その後農作業は省力化され農機具や農薬による災害，出嫁や粉塵，アレルギー，騒音などが研究対象となり更に生活水準の向上と共に肝疾患，糖尿病，肥満が問題となり，高齢化がすゝむと共に高血圧，心不全等慢性で完治しない老人病へと大きな変化をみせ労働，栄養面からの検討と更に多発する癌の早期発見等地域ぐるみの保健活動へと時代の推移と共に変化している。

更に近年は身体的な不健康に加えて精神の失調が目立ち神経症，ノイローゼをはじめ社会生活上不適応症状を来す人が多く，農村でも一人ぐらしや，ねたきりなど孤独な人が増加している。空しくうつうつとすごす人が増加し痴呆症や自殺も増加している。時代変化のテンポも早く家庭が形骸化する中で連帯がなく精神，神経の衰退を指摘する声も高まっている。

いま農家は四十年間の間に大きな変化を来し，衣食住も豊かで生活環境は充足したが，世帯人数も少く，核家族化し，共稼ぎも多くなり三代同居家族は少くなった。四季を通じて行なわれてきた伝統行事も影をうすめ近隣との交流も少くなっている。農村でも経済優先の行動が目立ちストレスが高まり心の豊かさが少くなっているようである。従来家で行われてきた出産や死亡は家以外の施設で行われ，身近に生や死を考える事も少くなっている。

米を主体とした農業は，国際的にも変革をせまられ後継者も不足し展望がもてず不安が募っているようである。

農村医学研究会もかゝる農業の現況や将来の展望について大きな関心を持たざるを得ない。

私は農業に対し大きな希望を持ち，その果す役割に期待してきた。農業は生命産業であり，生命の畏敬を知り，生態系を肌で感じ，生存秩序を学習し，太陽や空気，水，大地の恩恵を受け，それに感謝し，一人では生きられない事を実感し連帯や協力を養い，伝統的な文化の中から先人の知恵を学び尊い人間性を育ててきたのである。

如何に科学技術が進歩しても，自然を離れて人間の生命はありえない。失れた肉体や精神の衰弱，自然や社会環境の欠落は再び農業，農家，農民によって活力を蘇がえらせねばならないと思う。この点に注目し，農村医学研究会は新しい取り組みを果さなければならないと考えている。

20周年に当って

農村婦人の貧血調査に想う

富山県農村婦人組織協議会長　竹 部 喜代子

富山県農村医学研究会が結成されて20周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。

研究会発足年の昭和44年当時、木下県農婦協会長（現顧問）が「農村医学研究会」の会名を連発されていられましたが、今考えると会長の農協婦人部員の健康守りを医学的に取り組める組織の出来た喜びの表現だったと思います。45年に会長席のバトンを受けた私は木下会長の言葉が耳に残り研究会の理事会には出来るだけ欠席してはならないと心掛けたものでした。

当時、全農婦協の会長会議に出席して驚いたのは、農村婦人の8割までが何等かの障害をもって働いており、その上血がうすいと話し合われていたことでした。県によっては医大や農村医学研究会と提携して貧血調査や健康調査を実施し、その実態調査の結果を挙げて説明され訴えられるという進歩的な取り組み運動が次々と報告されていました。

実は、昭和34年から農協婦人部長と婦人会長兼務で活動していた私は、行政の検診・保健活動への協力はもとより、結核撲滅運動、営養改善や食生活改善運動，献血運動など時代のニーズに沿い活動をすゝめてきていましたので県内農村婦人の貧血が進んでいることを知っていたが，対策に決め手がなく悩んでいただけに，先進県の医学的究明のともなった活動に大きく刺激をうけました。

「献血車に来て貰い献血をすると自分の血液型を確めて貰えるよ」と話すと早速実施しようということになりました。集った60人余りの中で献血の出来た方は僅か10人余りでした。健康を自負している部員達はその結果に驚きましたが，県大会の地区分科会席上で各地での実施結果を問い合わせてみると似たり寄ったりのものでしたという報告が数年も続くなかで，農業と農外就労に寸暇を惜しんで働く母ちゃん達に起きているからだの異変に大きな不安をいだいた県農婦では，昭和46年の第18回県農婦協大会の申し合わせに「献血にも適さないうすい血を農村から追放しよう」の1項を入れ部員への警鐘を鳴らしたのでした。

大会を終えて事務局に帰ると，厚生連の岩井参事様がお見えになり申し合わせ事項となった背景や実態を問い糺(ただ)されました。婦人部活動で捕えている現状をお話し申し上げ「是非医学的実態調査でその原因を究明し，改善対策を指導して慾しい」と要望しました。これが翌47年から3ケ年にわたって富山県下農村婦人のうすい血の調査を農村医学研究会で取り組まれる導火線となったのでした。

農村医学研究会，県農協厚生連，農協婦人部が一体となってすゝめる調査に，婦人部の提案事項が研究課題となったので，婦人部は燃えました。然し当時は保健事業は行政がやるべきものとの考えが農協に強くありましたから大変でした。調査対象婦人部の中には農協でお叱りを受けたの泣き声や「もったいない血を採るとは何事だ。県農婦協は何を考えているのだ」とお叱りの電話が入るなどきびしい壁にぶち当り乍らの運動展開となりました。一方，調査団の方々も始めは医学研究対

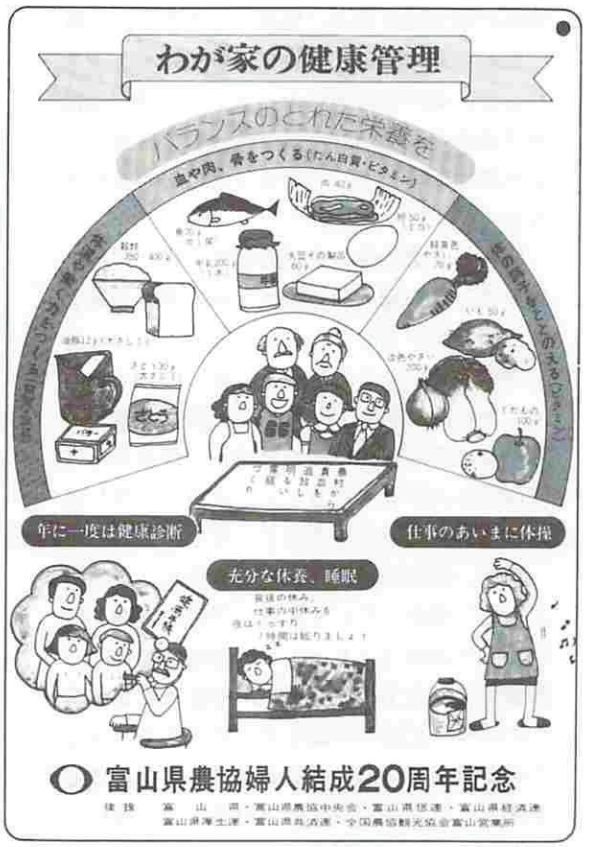
象となるから採血者へ協力粗品を贈るべきとの学究者としてのご意見もありましたが，現地での色々な雲行きから「自分達の健康実態の究明であるのに認識がおかしい」のつぶやきも聞えてくるようになりました。私達農協婦人部は只々申し訳なく身の縮む思いで成り行きを見守り，何としてもこの調査を成功させねば到底理解を得られないものと目標を置き頑張りました。

農村婦人のうすい血の調査結果のまとめ報告のされた農村医学研究会の理事会を終えて帰宅したところ，テレビが今聞いてきたばかりの調査結果を報導しているではありませんか。ほんとうに驚きました。『農村婦人の約２人に１人が血がうすいの調査結果』は県内に大きな波紋を投じました。色々ありましたがこの調査により，関係機関・行政あげて貧血追放のための啓発指導が行われるようになり，健康管理活動への関心が農協内に大きなうねりとして高まっていきました。第１年の貧血調査をもとに次々と角度を替えて行われる追跡調査に，農協生活指導員が積極的にとりくめる職場内での理解も得られるようになりました。婦人部では，部員自らの採血調査の結果に大きく刺激を受け，さしもの健康自信型も，我慢型も兜をぬぎ，貧血検査や検診活動に積極的に参加するという意識の高揚を図ることが出来ました。

昭和48年の県農婦協結成20周年の記念事業には、諸調査の結果をもとにした部員１入１人の実行事項をイラストで表現し，これを刷り込んだ「わが家の健康管理」しおり下敷を７万５千枚作成して全部員に配布し啓発を図ると共に，年間緑黄野菜の自給運動をはじめ，農家の特性を生かした食生活の見直し運動，農協検診事業の拡大と利用運動，受検推進運動を婦人部の活動の柱に据えてすすめてきました。

かえりみると，農村婦人のうすい血の調査に始まり，糖尿病，肝機能障害，みそ汁の塩分測定，高齢者対策等の諸調査を10余年間にわたり，農村医学研究会では，農協婦人部員・家族を対象に調査研究をすゝめられ，数々の研究結果による正しい健康管理の指導啓蒙をいただいてきたことに深く感謝申し上げるものであります。

21世記にむけ，日本の人口問題，高齢化の進行問題，地球的に考えねばならない環境問題等々山積しております。新しい時代ニーズをふまえた研究が一層進み，明るく心豊かな健康農村づくりに貢献されるよう，富山県農村医学研究会の益々のご発展をお祈り申し上げます。



昭和48年，県下全婦人部員家庭に配布した「わが家の健康管理」しおり下敷（表裏カラー刷りで７万5,000枚作成。費用は約100万円）

20周年に当って

20 周 年 を 迎 え て

丸ノ内病院　長谷田　祐　作

日本農村医学会の第1回学術総会が開催されたのは昭和27年（1952年）7月，学会長は若月俊一氏，長野市において挙行された筈で発表演題は70。特別講演として「外科領域における栄養問題」であったと記憶している。

富山県で農村医学研究会が全県的規模で発足したのは昭和44年（1969年）で研究会誌の第1巻が刊行されたのは翌年3月であった。発足時の特別講演は日本農村医学会の生みの親として知られる上記，若月俊一氏であった。

第1巻の内容としては県内における農村医学関係研究業積を出来るだけ収録，第2巻以降の基盤とすることに意見は一致，編集委員としては農協高岡病院勤務経歴のある北川鉄人氏を中心とし，農村診療に多年携ってきた上市厚生病院の越山健二氏，当時県立大谷技術短大・衛生工学科に在職中の不肖，私の3名が取り敢えず担当として県内各組織・機関に働らきかけようということに決った。

私は終戦当時，岡山県倉敷市郊外の農村地帯で内科・小児科開業，富山県へ帰って来たのは昭和22年6月で当時西砺波郡高波村から招聘をうけ同村や隣接の福岡町で内科小児科医業に従事した後，富山県へ就職しました。農村における医療・保健，健康管理にはもともと深い関心を持っていた関係もあり喜んで参加させて頂いた次第である。

第2巻からはいよいよ原稿募集となり最終的に掲載となったのは，研究業積として原著2篇「へき地学童の……」（豊田会長他），「農業機械災害事故……」（佐藤助教授・県立大谷技術短大他），調査研究として「ビニールハウス病……」富山市沢田秀忠氏，「農夫症の調査」富山保健所・渋谷知一氏他，など8篇，学会印象記として「第19回日本農村医学会の印象」長谷田の一篇，会員だよりとして「昭和46年度農村保健対策関係事業について」富山県厚生部公衆衛生課，「変貌する農業」吉田，小川氏の2篇となったのである。

先ずは上乗の出足でなかったかと思う。以後第3，第4巻と順調に研究業積，調査資料，学会報告，会員だよりなど充実した内容で毎巻を会員各位にお届けすることが出来るようになり現在に至っているわけで会員各位は元より関係各位には御尽力・御協力に対し深甚の謝意を表したいと思う。また発足以来いろいろと御協力頂いた各位の中には既に故人となられた方も少なからず，これらの方がたの御冥福を心からお祈り申上げる次第であり，過ぎ来し20年の重みを今更のように痛感させられるのである。

さて研究業積を内容的に検討すると日本及び県内農村事情を単的に反映している。身体的過労に関係が深いと思はれる腰痛，肩こり，貧血などに関するものから始まり，機械化，農薬使用に推移すると災害・事故から中毒，肝臓障害などの課題が取り上げられるようになった。最近では花粉などに起因するアレルギー問題などが研究業積に表はれると共に高令化社会は農村にも波及し老年医学も重視されてきている。

農業経営の内容変化や社会的変化の傾向は即，農村医学的対象の推移として表はれることを私達は卒直に認めざるを得ない。

本年4月上旬，前年（平成元年）度の農業白書が発表されると思うが私達はこれらの白書を，どう捉え，どのように問題を整理・把握し対策を摸索すべきか，将来的にも慎重にかつ継続的視野に立って検討すべきものと思う。

20週年の記念すべき日は，よく言はれるように一つの通過点である。今後共，会員各位の御意見を尊重し医学的には各専門分野の先生方の御尽力を煩はし，進路を見失うことのないよう更なる前進を期待致したいものである。